

「異文化」の創造的融合の理解と交流を目指した 日本語文化研修(Ⅱ)

—— “豊前・豊後地域(中津・宇佐・由布院・国東)の文化史”の現地研修——

A Study of Field Trips Held as Japanese Language and Culture Training Course to Understand Creative Cultural Fusion and to Promote Exchange (Ⅱ)

—— A Field Trip to Study the History of Culture in Buzen and Bungo District (Nakatsu·Usa·Yufuin·Kunisaki) ——

戸田利彦
Toshihiko TODA

In the last paper, a field trip to study regional cultures held during the Japanese language and culture courses of a university was analyzed and problems were summarized for future plans and practices of study camps and field trips. This paper focuses on a field trip to study regional cultures of Buzen and Bungo. It is planned and put into practice for the purpose of understanding the cultures of Nakatsu district, Usa district in northern part of Ooita Prefecture and Ufuin district, Kunisaki district in southern part of Ooita Prefecture. Its characteristics are summarized as follows:

- 1 This field trip is especially attaches importance to understanding creative cultural fusion and promoting exchange.
- 2 This field trip is a result of two field trips in Kyoto, a study camp in Hiroshima City, a small field trip in Hiroshima Prefecture, a field trip in Setouchi, a field trip in Shimane Prefecture, a field trip in Geiyo district, a field trip in West Chugoku district, a field trip in Yamato district, a field trip in Kibi district, a field trip in Tsukushi district, a field trip in Oomi district, a field trip in Sanuki and Tosa district and a field trip in Settsu and Yamato district.
- 3 A regional study concerning history of culture in Nakatsu, Usa, Yufuin and Kunisaki district, is stressed in this trip.
- 4 This field trip includes six lectures, five investigations with lecturers and a free talk by local speakers.
- 5 This field trip is planned and put into practice mainly by students who are members of the Hijiya University Japanese Language Culture Course.
- 6 There are nine participants (including two foreign students) who are enrolled in ‘Nihongobunka Kenshuu (Japanese Language and Culture Training Course)’ for third year students.
- 7 An inspection trip by teachers was also made before this field trip.

Practices of the field trip are analyzed based on questionnaires filled out by the participants. Then, problems are summarized for future field trips.

はじめに

昨年度から、研修の新たな試みとして、「異文化」の創造的融合に着目し、その理解と「異文化」を構成するヒト・モノ・コトとの交流を主眼とした研修を実施することになった。それは、日本語文化研修の歴史の中では、第Ⅲ期4カ年計画の最終年度（2007年度）にあたり、“「異文化」の創造的融合の理解と交流”というテーマによる新企画をもふまえ、研修のタイトルを、“日本人の心の原風景：摂津・大和を訪ねる—難波・桜井・吉野—”とし、融合の前提となる日本文化の基層を、精神文化を中心に探求することを主目的として研修を実施した。今回はそれを受けて、九州の北部及び瀬戸内の西端という特異な地理的位置を占める豊前・豊後地域を訪問した。両地域は、瀬戸内海という海の回廊を介してその東端にある摂津とつながっており、古代日本の中心的文化圏を形成した畿内の大和地域にとっては、大和川でつながっていた摂津の難波を大陸文化受容の玄関口とするなら、筑紫地域と並んで、外の世界と極めて直接的に接触する門にあたる。この点において、豊前・豊後は、日本を代表する文化交流の先進地域であったといえるのである。

上垣外憲一氏は、日本文化の原型について、その著書『日本文化交流小史—東アジア伝統文化のなかで—』（吉川弘文館、2000年）の中で、次のように述べている。

八世紀までの日本は、移民が次々と渡来して混淆し、「るつぼ」の中で新しいアメリカ人という民族が形成されていった、十九世紀までのアメリカに似た状況にあった。そうした渡来と混淆の繰り返しがいわゆる日本文化の原型を作り上げていったのである。（同上書、p14）

ここには、古代日本における日本文化の原型の形成のありようが端的に指摘されているが、大陸文化受容の上で瀬戸内海という海の回廊の西端にあって筑紫地域に隣接する豊前・豊後は、氏のいう「渡来と混淆の繰り返し」の行われた代表的先進地域である。したがって、そこには外来文化と日本文化という「異文化」が融合した日本文化の原型が内臓され、また、その先進地域としての伝統が新たな融合を生み出しながら現在も継承されていると考えることができよう。

そこで、今回の研修では、タイトルを、“祈りと保養：豊前・豊後の文化を訪ねる—中津・宇佐・由布院・国東の文化史—”とし、融合の実際となる神仏習合や健康保養文化を共通テーマとして企画を立案した。古代日本の文化交流の先進地域を形成した豊前・豊後を対象地域とし、宇佐神宮の御神体としての薦枕の薦を採取する三角池のある薦神社が鎮座し、明治期の啓蒙家であり名文章家でもあった福澤諭吉が幼少年期をおくった中津、九州最古の前方後円墳としての赤塚古墳をはじめとする古墳群があり、神仏習合の発祥地としての宇佐神宮が鎮座する宇佐、豊後富士由布岳を神体山としながら神社としての古形をとどめる宇奈岐日女神社が鎮座し、西欧の保養文化に学びながら独自の健康保養温泉地を形成している由布院、宇佐神宮の影響下で六郷満山文化という独特の仏教文化が成立し、豊かな自然が瀬戸内海国立公園の一部を形成する国東で研修を実施した。

今回の研修は、全員参加形式の学校（日本語文化専攻）行事、全10回の自由参加形式の学会（日本語文化学会）行事を経て行われた第1回のコース行事（授業）である。過去10回の研修^{注1}の問題点もふまえ、‘瀬戸内地域及びその近接地’外の通常研修として2泊3日の日程とし、計11回の事前研修（VTRによる過去の研修成果の活用を含む）、“～さんを囲む会”、地元ボランティアの活用、ギャラリートーク形式の講演、過去の研修（第7回筑紫地域）の移動ルートに関する情報（所要時間や休憩場所）の活用などの試みを継続しながら実施した。

また、1日目夜のフリートークと2日目午前の現地説明の同一地元講師による一体的運営、芸術分野の絵画及び詩と自然とのかかわり（由布院美術館・佐藤溪と自然・由布院の文化）に関する地元講師による講演・展示説明、移動手段としてのフェリーの利用などの新しい試みも取り入れ企画・運営を行ったが、今年度から本格的にはじめることになった“「異文化」の創造的融合の理解と交流を目指し

た日本語文化研修”の今後に向けての有効な視座を得ることができた。そこで、本稿では、その計画から実施に至る経緯と実施内容をふまえてその結果の報告を行い、授業科目としての『日本語文化研修』を中核とした新企画としての日本語文化研修のあるべき姿について考察することを目的としたい。

1. 実施までの経緯

「第11回日本語文化研修旅行（日本語文化研修）祈りと保養：豊前・豊後の文化を訪ねる—中津・宇佐・由布院・国東の文化史—」の訪問地域は、前回実施の「第10回日本語文化研修旅行（日本語文化研修）日本人の心の原風景：摂津・大和の文化を訪ねる—難波・桜井・吉野の文化史—」の参加者を対象にしたアンケート調査の結果、過去の実績とテーマの系統性、最近の話題性などを総合的に判断して決定した。第11回の今回は、第Ⅰ期（1999～2001）、第Ⅱ期（2002～2004）、第Ⅲ期（2005～2008）に続く第Ⅳ期の初年度にあたり、昨年同様、原則に基づき“「瀬戸内地域及びその近接地」外で2泊3日”の研修を実施した。

実地におけるヒト・モノ・コトを介して交流しながら、異文化としての豊前・豊後の文化を理解し、自文化としての瀬戸内文化を見つめ直してみることに、また、特に、精神文化を中心とする異文化の創造的融合を中核とした共通テーマである“祈り”及び“保養”を基盤として、比較の観点もふまえて外来文化と日本文化の異文化としての融合のありようを考察し、日本とは何かを考えること、それが、今回の企画の趣旨である。異文化の創造的融合の実際として、具体的には、“祈り”として、日本文化としての神道、外来文化としての道教、仏教などとの融合によって成立したとされる宇佐神宮の八幡信仰やその影響下で生まれた国東半島の六郷満山文化に見られる神仏習合思想、また、“保養”として、西欧の保養文化と日本の温泉文化の融合した由布院の生活感を生かした健康保養温泉文化に着目した。特に、第Ⅳ期では、当該文化の特殊性と普遍性の理解と共にその文化とのヒト・モノ・コトを介した交流を重視しているため、その核となる郷土史愛好家、文化財ガイド、博物館学芸員等の地元講師との交流を促進することに従来にも増して留意した。

研修の訪問地域が九州地方となったのは、これまででは第Ⅲ期の「第7回日本語文化研修旅行 文明の十字路：筑紫の文化を訪ねる—吉野ヶ里・柳川・大宰府の文化史—」（2005）で、今回で2度目である。前回も2泊3日の日程である。今期は、精神文化を中心とする異文化の創造的融合を中核として当該文化を理解するという意図もあり、まず神仏習合の発祥地としての宇佐神宮のある豊前地域を選択した上で、その強い影響下で独特の仏教文化としての六郷満山文化が開花した国東半島、日本有数の温泉地帯の中にあつて西欧の保養文化を取り入れ、生活感のある健康保養温泉地として独自の温泉文化を創出した由布院のまちのある豊後を対象地域に加えた。

豊前及び豊後の両者を併せて対象地域とすることの有効性については、以下の7点があげられる。

- ①いずれも九州北部であると共に瀬戸内海の西端に位置するという地理的条件の中で生まれ、現在は大分県という行政単位として一体化している豊前・豊後の文化を理解することで、自然と人間の関係の有様を考えてみられること
- ②シンクレティズムとしての神仏習合の発祥地としての御許山と宇佐神宮、国東修験の聖地としての熊野神社及び熊野磨崖仏、西の叡山としての六郷満山文化を代表する真木大堂、両子寺など、日本の基層的精神文化と深いかわりを持つ地域であり、日本人の心や信仰の原点をテーマに研修を行えること
- ③中津城を中心とした城下町としての中津、宇佐神宮周辺に典型的な門前町の残る宇佐、由布岳と温泉を中心に自然との共生を目指す由布院と、過去から現在にいたる日本のまちづくりに関する研修を行えること

- ④宇佐における九州最古の前方後円墳赤塚古墳の存在が示すように古代九州の一つの中心圏を形成する地域であり、過去に研修で取り上げ当該地域で実地踏査を行った出雲王国、吉備王国、吉野ヶ里を中心とした筑紫地域の古代王国、大和王権との関係を検証できること
- ⑤由布院にある美術館の展示作品、国東の仏像・石仏など、作品に関する美術面からの実地踏査が可能なこと
- ⑥中津の中津城周辺と隣接した掘割、宇佐の平野部に残るかつての海軍航空隊宇佐特攻基地の痕跡、由布院の由布岳・金鱗湖、国東の奇岩・奇柱の立ち並ぶ耶馬や中世の荘園風景が残る小埜地区など、景観の観点からも考察を行えること
- ⑦これまで研修で訪問した備後・備前・伊予・讃岐などの同じ瀬戸内地域と豊前・豊後の相違点や北部九州に位置する豊の国としての独自性について考察できること

まず、豊前地域の訪問エリアとして、宇佐市を選定した。主たる理由は以下の7点である。

- ①宇佐風土記の丘の川部・高森古墳群が、第5回の飛鳥の古墳群、第6回の吉備の作山古墳・造山古墳、第10回の桜井・天理の纏向古墳群・柳本古墳群と、古墳時代の王権と祭祀という点で、また、御許山と宇佐神宮が、第6回の吉備中山と吉備津神社、第8回の近江の比叡山・八王子山と日吉大社と、第10回の大和の三輪山と大神神社と、聖なる山と神社という点で、テーマとして系統性があること
- ②宇佐神宮奥院は拝殿のみで本殿がなく、第10回の大和の大神神社と、神社の形態という点で、系統性があること
- ③2008年秋に宇佐神宮の祭礼行事としての「行幸会」が400年ぶりに再現され話題性があること
- ④宇佐神宮を中心に国東の仏教文化も含めて世界遺産登録運動が推進されており話題性があること
- ⑤大分県立歴史博物館があり、八幡信仰や六郷満山文化などを中心に、豊前・豊後の風土・歴史・文化が総合的に学べること
- ⑥九州最古の前方後円墳の赤塚古墳をはじめとする古墳群や宇佐神宮の前身としての歴史ある社が存在することで邪馬台国の候補地の一つとする考えもあり、第7回の吉野ヶ里遺跡、第10回の桜井の卑弥呼の墓とも目される箸墓古墳も含めた纏向遺跡との比較の中で、邪馬台国の所在地に関する研修が可能なこと
- ⑦森厳かつ広大な神域を持つ宇佐神宮の境内及び周辺での散策によって神仏習合の霊地の雰囲気を感じることができること

宇佐神宮の御神体の薦枕は、中津の薦神社の三角池から採取される。これは安心院出身とされる宮司としての宇佐氏が、磐井の乱加担の罪で一時期中津郊外に移されたことに起因するとの説もあるが、いずれにせよ宇佐神宮を介して、宇佐と中津は古くより深い関係にある。また、前述したように、第IV期の研修では精神文化を中心とする異文化の創造的融合を中核として共通テーマを設定することにしており、その点で『西洋事情』『文明論之概略』の著者である中津出身の啓蒙家福澤諭吉による西洋文化の受容の実際は、異文化の受容のあり方を考察するうえで興味深い。幕末明治維新の思想と人物という面では、第4回の西中国地方（長門・石見）の津和野の津和野藩校養老館出身の先哲たち、萩の吉田松陰・松下村塾の塾生たちなどとの比較もしうる。諭吉が幼少年期を過した中津には、福澤諭吉旧居・記念館があり、啓蒙家としてだけでなく名文章家としても名高い諭吉について学ぶことができる。当館が往路における通過点的スポット、すなわち休憩及び時間調整の適地にもなりうることを考慮し、中津を訪問エリアとして選定した。

また、豊後地域の訪問エリアとしては、由布院を選定した。主たる理由は以下の7点である。

- ①豊後富士としての由布岳と宇奈岐日女神社が、今回の宇佐の御許山と宇佐神宮も含めて、第6回の備前の吉備中山と吉備津神社、第8回の近江の比叡山・八王子山と日吉大社と、第10回の大和

- の三輪山と大神神社と、聖なる山と神社という点で、テーマとして系統性があること
- ②由布院温泉が、日本を代表する温泉地の別府の背後にありながら、小さな別府になることよりもドイツのバーデンヴァイラーのまちづくりに学びながら独特の健康保養温泉地を目指しており、第3回の芸子の松山の道後温泉と、温泉地のまちづくりとして系統性があること
 - ③由布院のまちづくりが、NHKの番組として2003年11月に“プロジェクトX”で、2005年度下半期の朝の連続テレビ小説“風のハルカ”で取り上げられたことがあり、話題性があること
 - ④由布院盆地の中心付近、由布岳を望む大分川のほとりに由布院美術館があり、私設美術館の集積地のシンボルとしての美術館を通して、自然・風土とまちづくりも含めた芸術との関係について学べること
 - ⑤由布院美術館に常設展示されている広島熊野町出身の放浪の詩人画家佐藤溪や由布院を自主トレーニングの地としている広島カープの選手の話題を通して、広島と由布院の特別な関係について学べること
 - ⑥農業と温泉が一体となってまちづくりが行われており、自然と共生したまちの景観という面で考察ができること
 - ⑦「牛喰い絶叫大会」「ゆふいん音楽祭」「湯布院映画祭」をはじめ多くのイベントが現在も継続され、新しい“祭り”の先進地として、現代的な魅力があること

国東には、神仏習合の発祥地としての宇佐神宮を中核として発展した六郷満山文化という独特の仏教文化の伝統がある。つまり、国東は宇佐と一体化して、神仏習合の世界を形成している。中でも自然のままの崖に仏を刻んだ熊野磨崖仏をはじめとする多くの磨崖仏には、修験道を中心的な背景とした神仏習合の典型的な具体相を見ることができる。特に、修験道という面では、前回の大和の吉野の修験道と系統性がある。宇佐神宮大宮司の氏寺として開かれた富貴寺の大堂は、九州最古の木造建築として国宝に指定されており、平安時代の浄土世界の実際について学ぶことができる。両子寺は、古くより山岳修行の根本道場であり、特に江戸期よりは六郷満山の総持院として全山を統括してきた歴史を持ち、現在では瀬戸内海国立公園の一部としての貴重な自然を保持している。国東半島中心部の山岳地にあり、帰路のフェリーの出港地である半島北部の竹田津港への経路にある当寺院が、最終研修スポットとして時間調整の上で適地になりうることも考慮して、国東（豊後高田市／国東市）を豊前地域の訪問エリアに加えた。

以上のような経緯で、最終的に、中津・宇佐・由布院・国東を訪問エリアとすることになった。

順路と宿泊施設を考慮して、宇佐と由布院を宿泊地とした。2008年4月に、授業科目としての『日本語文化研修』の受講者の登録があった。2008年5月に企画の原案を立て、文部科学省（私学事業団窓口）の「私立大学教育等経常費補助金特別補助」の企画として申請した。豊前・豊後の文化施設や史跡に関する情報収集を行い、訪問エリアの研修スポットを絞り込んでいった。受講者には、夏休み中に、豊前・豊後の自然と風土に関するレポートAをまとめ、休み明けに提出するように求めた。その後、日程と内容を詰め、研修の全体テーマを示すタイトルを「祈りと保養：豊前・豊後の文化を訪ねる—中津・宇佐・由布院・国東の文化史—」とすることにし、11月中旬に研修企画の予算化の確定を受けた後、12月の初旬から地元講師への講演等の依頼を行うと共に12月中旬に一般の参加者を募集した。

由布院美術館に連絡を取り、高橋鸽子氏（由布院美術館館長）に講演と展示説明をお願いすることになった。次いで、大分県立歴史博物館に連絡を取り、東洋・日本美術史を専門とする井上大樹氏（大分県立歴史博物館学芸員）に講演と展示説明をお願いすることにした。また、福澤諭吉旧居・記念館に連絡を取り、園憲一氏（財団法人福澤旧邸保存会事務局長）を紹介していただき、講演と記念館での展示説明をお願いした。さらに、宇佐市観光協会事務局長の寶来賢太郎氏に元小学校教員で郷

土史愛好家でもある佐藤稔明氏(宇佐市ボランティア観光ガイド顧問・前会長)を紹介していただき、宇佐の自然と風土に関するフリートークと宇佐神宮の現地説明を依頼した。また、豊後高田市観光協会を通して綾部栄徳氏(豊後高田市文化財ガイド)を、熊野磨崖仏管理委員会を通して畑尾徳幸氏(熊野磨崖仏管理委員会副会長/熊野総代長)を紹介していただき、両人が知人ということで、両氏に熊野磨崖仏の現地案内を、真木大堂、小崎地区田染荘、富貴寺の現地説明を綾部氏にお願いした。最終的に、6名の個性豊かな方々に、講演、展示説明、現地説明、フリートークをお願いすることになった。また、由布院の宿泊所としたやわらぎの郷やどやのマネージャーの中野雄三氏には、夕食の会場で由布院で自主トレーニングを行う広島カープの選手とのかかわりを含めてウェルカムスピーチをしていただくことになった。

12月中に1回、1月中に3回、研修の前日に1回、1日目の往路のバス内で4回、2日目の宇佐から由布院への移動中のバス内で1回、3日目の由布院から国東の熊野磨崖仏への移動中のバス内で第11回の前半、富貴寺から両子寺への移動中のバス内で第11回の後半と、計11回の事前研修を行った。

第1回では、まず、費用の支払い方法と期限の確認を行った。また、研修目的と基本ルート(含む日程原案)をふまえた上で、‘第7回同様、九州を研修地とすることになったが、今回から異文化の創造的融合を中核として共通テーマを設定することになり、外来文化と日本文化の比較をも含む点で“異文化”の理解のレベルが高くなる分、研修の成果はこれまで以上に参加者個人個人の自覚と事前学習にかかってくる’ことを強調し、事後に報告書用に提出するレポートCの内容と形式、研修中の役割分担について確認した。また、冬休み中に実地踏査の個別テーマについてレポートBとしてまとめ年明けに提出することを求めた。第2回では、実地踏査の方法の第1段階として、主たる研修スポットを点で捉えることを目的に、日程第1日目の代表的な史跡・文化施設について学習した。第3回・第4回も、同様の目的でそれぞれ第2日目、第3日目の代表的な史跡・文化施設について学習した。

その過程で、適宜提出されたレポートBを紹介し、実地踏査の方法について確認した。

第5回では、実地踏査の方法の第2段階として、自由研修エリア及びルートを面で捉えることを目的に、事前調査旅行(下見)の報告と質疑応答を行いながら、研修エリアの空間としての規模、文化施設や遺跡の配置とそれらを結ぶルートについて学習し、当日、事前に自由研修計画書^{注2)}を提出することを確認した。また、研修中及び事後報告書作成時の役割分担を決定し、それぞれ準備を確認した。最後に、完成したしおりに基づいて最終的な日程について確認した。尚、各自の研修テーマの深め方を学ぶことをねらいとし、今回の研修テーマに関する研究書の一節や研究論文、新聞記事を、第1回～5回に適宜読んで学習した。第6回～11回は、実地踏査の第3段階として、主な研修スポットと自由研修のエリア及びルートを空間で捉えることを目的に、第6回“由布院のまちづくりの特色と担い手”，第7回“神仏習合—宇佐神宮の成立と東大寺創建—”“宇佐神宮の八幡造り”，第8回“西洋文明の受容と啓蒙思想家福澤諭吉”，第9回“中津の薦神社と宇佐神宮”，第10回“由布院のまちづくりと由布院美術館”，第11回“六郷満山文化”“琵琶法師と国東修験”をテーマとしたVTRを、適宜関連資料を配布して視聴した。第5回の事前研修の前の2月初旬には、引率予定教員1名と共に、本番の日程にしたがって事前調査旅行(下見)を実施した。講演、展示説明、現地説明、フリートークをお願いした方々への挨拶と打ち合せ、研修スポットやエリアの踏査と詳細情報の収集、宿泊所との最終打ち合せなどを行った。事前調査旅行によって、国東の積雪状況や宇佐から由布院、由布院から国東の竹田津港への道路状況や、竹田津港から徳山港へのフェリー及び海路の状況の把握、当日のシュミレーション体験に基づく現地説明の依頼、入館料等の確認、中津、宇佐神宮、由布院の自由研修エリアの現況の把握及び最新情報の入手、バスの駐車場・待機場所の確認など、研修本番に向けての最終的な詰めを行った。

Ⅱ. 実施後の冊子の編集—『土地のたからまるかじり』第11号

まず、講演や現地説明をお願いした講師の方々全員からいただいた原稿を、‘土地からのメッセージ’として掲載した。題目と執筆者は以下の通りである。

- 「福澤諭吉の中津への思い」(p.1~4) 財団法人福澤旧邸保存会事務局長 園 憲一
 「県立博物館で仏像を調査・研究すること」(p.5~8) 大分県立歴史博物館学芸員 井上大樹
 「古代地名の研究—豊前宇佐地方の事例—」(p.9~12) 宇佐市ボランティア観光ガイド顧問・前会長 佐藤稔明
 「由布院美術館の宝」(p.13~16) 由布院美術館館長 高橋鸽子
 「鬼が一夜に築いた石段について」(p.17~18) 熊野磨崖仏管理委員会副会長／熊野総代長 畑尾徳幸
 「私の里田染の文化財」(p.19~24) 豊後高田市文化財ガイド 綾部栄徳

また、‘たからの発掘’として参加者(教員及び学生)から寄せられた12の文章を掲載した^{注3)}。学生から寄せられた11の文章を研修エリアで分類すると、宇佐関係が1編、由布院関係が1編、国東関係が2編、全体的なものが6編、特別なテーマに関するものが1編(豊前・豊後のまちづくり)と多様な観点からの研修の成果が寄せられた。形式面でも、評論文的なものから紀行文・エッセイなど様々なジャンルが見られ、日本語文化を専攻する学生らしい文章が並んでいる。特に、本研修に授業科目としての『日本語文化研修』の受講者として参加した学生の中に、「由布院の景観」と題して、由布院の保養文化としてのまちの景観を建築物を中心に実地踏査をふまえて独自の観点から考察したのが見られることは、注目される。『日本語文化研修』の最終レポートとして内容及び表現の両面で質の高いものとなっている。

グラビアの‘『学問のすゝめ』[1872年-76年・全17編]’‘『文明論之概略』[1875年刊・全6冊]’の写真は福澤諭吉旧居・記念館から、グラビアの‘応永本—宇佐宮神輿障子絵’‘富貴寺大堂実物大模型外部及び内部’は大分県立歴史博物館から提供していただいたものである。また、参加者の撮影した写真を、「ひと」「もの」「こと」の3つの巻に分け、‘旅行絵巻’のコーナーに掲載した。さらに、‘地元メディアの中の豊前・豊後文化—慶応義塾創立150周年記念イベント(福澤諭吉旧居前出発式)及び「行幸会」400年ぶり再現神輿行列(宇佐神宮)—’と題して、慶応義塾創立者福澤諭吉の故郷中津の福澤諭吉旧居前で行われた150周年イベントとしての「ツール・ド・慶応1200km」「歩いて識る150年“中津から三田へ”1500キロ」の出発式及び400年ぶりに再現された宇佐神宮の祭礼行事「行幸会」の神輿行列に関する記事を掲載した。結果として、総ページ数は136ページとなった。尚、表紙の‘由布院美術館より由布岳をのぞむ’の写真は、筆者が撮影したものを使用した。

Ⅲ. 「『異文化』の創造的融合の理解と交流を目指した日本語文化研修」における「『異文化』の創造的融合」の内実

ここでいう「異文化」は必ずしも外国文化のみを意味しない。例えば、人的な視点からは、自分に対する他者、他の家族、異性、他県民など、文化間の距離こそ違い、それらすべてを「異文化」ととらえることができると考える。本研修でも、これまで、主として地理的・風土的視点から広島(安芸)の文化あるいは瀬戸内文化を自文化ととらえ、備後・備中・備前、あるいは中国山地・山陰・畿内・四国・九州などの周辺地域の文化を「異文化」ととらえ、その理解を目指してきた。

日本語文化研修の中核としての授業科目『日本語文化研修』のシラバスでも、その概要に、瀬戸内

文化を自文化としてその周辺文化を異文化として対象化し、実地踏査を通して異文化及び自文化を考察し、文化的に重要かつ特色ある地域を訪問し、自分の足で歩き、地元講師の話もふまえて、その歴史、文学、風土、芸術、景観などを五感を通して理解し、日本語文化の基層をさぐる、と記している。また、到達目標の一つに、実際に学びながら文化の相違点を理解し、日本とは何かについて考えることができるようになることをあげている。

筆者は、前稿においてこの目標に到達するための方法として、日本事情教育的視点が有効なことを指摘し、具体的に、日本語文化を学ぶ日本人学生と留学生の共学、日本語と日本文化の学習の連動とバランス、異文化との比較の中での自文化の相対化、学習者と授業担当者の役割の重要性の4点について論じた。第Ⅳ期の今期は、異文化としての当該文化を理解しながら自文化としての瀬戸内文化を見つめ直してみると共に、特に第3の「異文化との比較の中での自文化の相対化」という視点から、精神文化を中心に、当該地域における外来文化と日本文化の「異文化」としての創造的融合のあり方に焦点を当てて共通テーマを設定して、日本とは何かについて考えることにした。

大隈和雄氏は、日本人の外来文化とのかかわりについて、その編著書『文化史の構想』（吉川弘文館、2003年）の中で、次のように述べている。

大陸から輸入された文化は、規範的なものとして受容されたので、日本人の間に浸透するようになって時が経つと、建前として人々の考えを拘束するようになった。やがて、あるべき建前と、あるがままの本音という二つの価値が考えられるようになると、あるべき建前を支える外来文化の相対化が始まって、あるがままの文化の価値が認識されるようになった。（同上書、p16）

ここには、古代前期の文化において、規範的なものとして受容された外来文化と日本文化のせめぎあいの中で、むしろ日本文化が再発見されていく姿が記されている。しかし、このせめぎあいの過程で外来文化と日本文化という「異文化」が融合し、新たな日本文化が創造されていく場合もある点は見逃せない。例えば、漢字という文字の輸入によって、仮名という日本の文字文化が生まれ、さらには和歌、物語などの新たな言語文化が開花する。また、密教や道教という外来の宗教文化は、神道と融合して修験道という日本固有の信仰を創造していく。近年、その過度の使用が問題となっている外来語も、原語を、音韻的には開音化して母音主体とし、表記的にはカタカナを用いて和語や漢語と差異化し、また、語彙的には意味を変容させながら、新たな言葉として日本語に受容されているものである。そこには、外来文化を日本化しつつ日本文化に融合させ、新たな日本文化を創造していくという日本人の心性、またそれによって形成される日本文化の特質が見えてくる。そして、この点こそ、研修において当該地域における外来文化と日本文化の「異文化」としての創造的融合のあり方に焦点を当てることの意味を示している。なぜなら、「異文化」が融合して生まれた新たな日本文化を、その元来の要素の一つである外来文化の視点をもって比較考察することで、より明確に日本文化の基層が浮かび上がってくるからである。換言すれば、日本国内における実地踏査において外国文化と比較しながら日本文化の基層について考察し、日本とは何かについて考えることができるからである。

「異文化」の創造的融合の内実とは、外来文化を日本化しつつ日本文化に融合させ、新たな日本文化を創造していくといういわば日本化のプロセスのことであるが、これは、特に思想、宗教などの精神文化において顕著にあらわれる傾向にある。日本人の感覚志向や直感的思考に基づく自我構造や精神文化に比した場合の物質文化の日本化のしにくさに起因するものと考えられるが、この傾向は精神文化を中心に「異文化」の創造的融合に着目することの有効性を示すものである。

『日本語文化研修』では、学問的にはいわゆる日本文化史を中心に取り扱うことになるが、文化史の一分野として日本語文化コースの専門領域としての日本語史や日本文学史などがあることを改めて認識する必要がある。また、日本文化史の中で、外来文化としての漢字という文字の受容が、後の日本文化全般の高度化に多大な影響を与えた点も見逃せない。日本語文化としての文字文化は、いわ

ば日本文化史の原点ともいえるのである。この点において、日本語文化コースの教員、学生が『日本語文化研修』において日本文化史に取り組むのは、日本語文化の基層として、政治や経済も含めた他の様々な部門の文化史を学んでそれらを総合しながら日本とは何かを考えることであり、また、日本文化史の原点として、日本語文化を見つめ直すことでもあり、極めて有効かつ自然な行為であることを付言しておきたい。

Ⅳ. 研修旅行及び研修合宿についてのアンケート調査

(1) 調査の目的

2008年度日本語文化コース研修旅行への参加学生に対して、研修の内容^{注4)}に対する評価・意見と研修合宿についての意見を主として求めるアンケートを実施した。

(2) 調査の方法

帰りのバス内で、調査用紙^{注5)}を配布し、単なる評価点を示すだけでなく、今後の改善へ向けてのコメントを期待している旨を付言した。

(3) 回収率

当日中に13名中13通(100%)の回収を得た。

(4) 研修に対する評価・意見と研修合宿についての意見

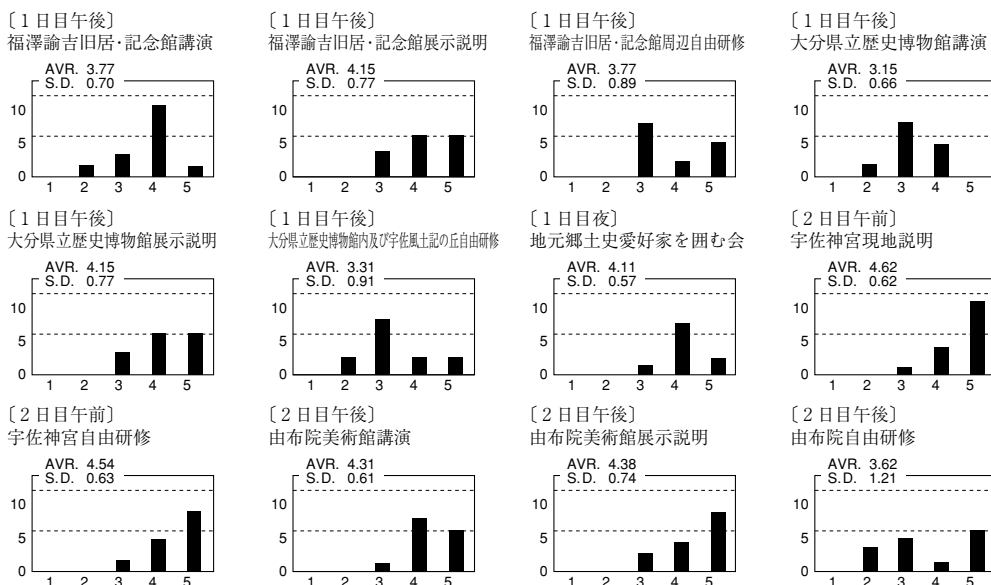
(I)(II)は研修に対する評価、(Ⅲ)(IV)は研修に対する意見、(V)(VI)は研修合宿についての意見をそれぞれ求める項目である。(Ⅲ)の一部及び(IV)(VI)は自由記述である。

(I)(II)の評価については、5段階評価(1~5)を得点化し、ヒストグラムを作成すると共に、平均値及び標準偏差(得点のバラつき具合を示す数値)を算出した(図一1)。尚、図中の“AVR.”は平均値、“S.D.”は標準偏差を示す。(Ⅲ)(V)については、選択式による意見の集計結果を円グラフで示した(図一2/図一3)。

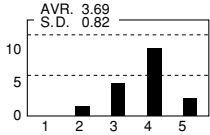
【研修に対する評価】

図一1

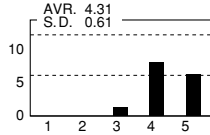
(1) 研修についての自己評価



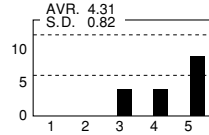
[2日目午後]
宇奈岐日女神社(自由必修研修)



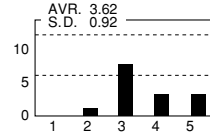
[3日目午前]
熊野磨崖仏現地説明



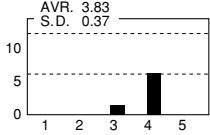
[3日目午前]
真木大堂現地説明



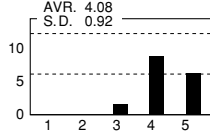
[3日目午前]
田染荘小崎地区現地説明



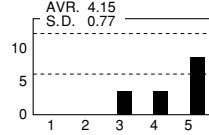
[3日目午後]
富貴寺現地説明



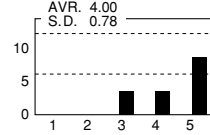
[3日目午後]
両子寺自由見学



イベント以外の自由時間

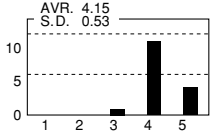


総合的達成度

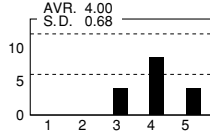


(II) イベント企画についての評価

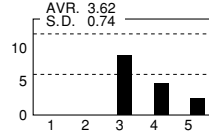
学内事前研修形式



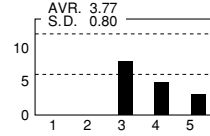
学内事前研修



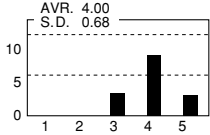
バス内事前研修形式



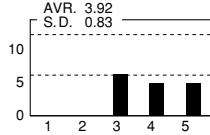
バス内事前研修



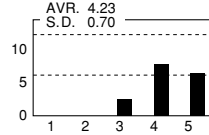
[1日目午後]
福澤諭吉旧居・記念館講演



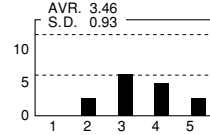
[1日目午後]
福澤諭吉旧居・記念館展示説明



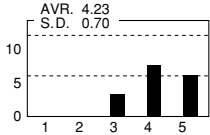
[1日目午後]
福澤諭吉旧居・記念館周辺自由研修



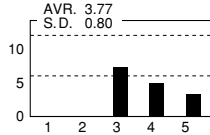
[1日目午後]
大分県立歴史博物館講演



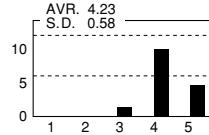
[1日目午後]
大分県立歴史博物館展示説明



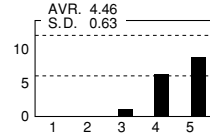
[1日目午後]
大分県立歴史博物館内及び宇佐風土記の丘自由研修



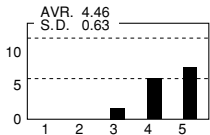
[1日目夜]
地元郷土史愛好家を囲む会



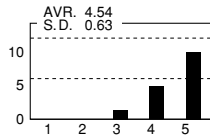
[2日目午前]
宇佐神宮現地説明



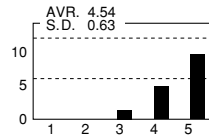
[2日目午前]
宇佐神宮自由研修



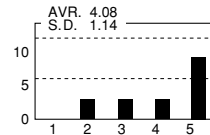
[2日目午後]
由布院美術館講演



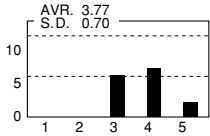
[2日目午後]
由布院美術館展示説明



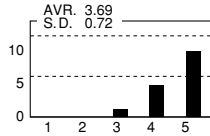
[2日目午後]
由布院自由研修



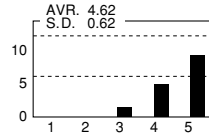
必修スポットを含む形式



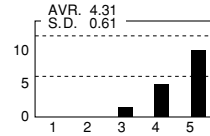
[2日目午後]
宇奈岐日女神社(自由必修研修)



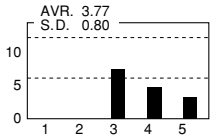
[3日目午前]
熊野磨崖仏現地説明



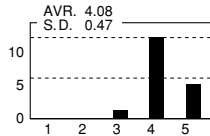
[3日目午前]
真木大堂現地説明



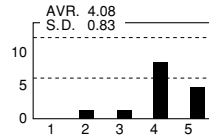
[3日目午前]
田染荘小崎地区現地説明



[3日目午後]
富貴寺現地説明



[3日目午後]
両子寺自由見学



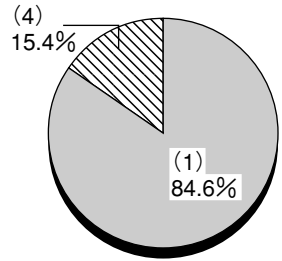
[研修に対する意見]

図-2

(Ⅲ) 研修の時期・日程・費用・場所について

①<時期>

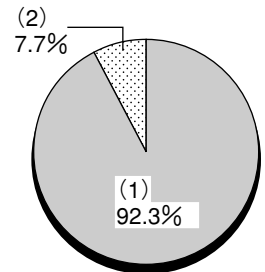
- (1) 今回のように春休み中に実施するのがよい。
- (2) 年末・年始を外した冬休み中に実施するのがよい。
- (3) 夏休みの終わりに実施するのがよい。
- (4) 夏休み始めの集中講義終了後(8月7日前後)に実施するのがよい。



②<日程・費用>

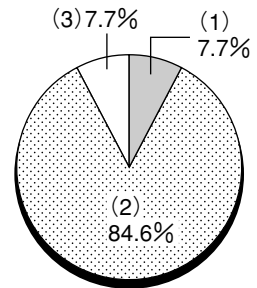
[今回の日程・費用について]

- (1) 2泊3日(2万円程度)でよかった。
- (2) 費用を3万円程度自己負担しても3泊4日ぐらいがよかった。
- (3) 〃 4万円 〃 4泊5日ぐらいがよかった。
- (4) 〃 5万円 〃 5泊6日ぐらいがよかった。



[今後の日程・費用について]

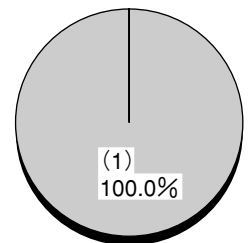
- (1) 費用1万円で行ける範囲で1泊2日がいい。
- (2) 〃 2万円 〃 2泊3日ぐらいがいい。
- (3) 〃 3万円 〃 3泊4日ぐらいがいい。
- (4) 日帰りがよい。



③<場所>

[今回の場所について]

- (1) 今回は中津・宇佐・由布院・国東(豊前・豊後地域:大分県)でよかった。
- (2) 善通寺・琴平・いの・高知(讃岐・土佐地域:香川・高知県)の方がよかった。(2年前実施)
- (3) 草津・大津・信楽(近江地域:滋賀県)の方がよかった。(3年前実施)
- (4) 吉野ヶ里・柳川・太宰府(筑紫地域:佐賀・福岡県)の方がよかった。(4年前実施)
- (5) 吉備路・備前・牛窓(備中・備前地域:岡山県)の方がよかった。(5年前実施)
- (6) 津和野・萩(石見・長門地域:島根・山口県)の方がよかった。(7年前実施)
- (7) 大三島・松山(芸予地域:愛媛県)の方がよかった。(8年前実施)
- (8) 横田町・出雲(奥出雲・出雲地域:島根県)の方がよかった。(9年前実施)
- (9) 福山・倉敷(備後・備中地域:広島・岡山県)の方がよかった。(10年前実施)
- (10) 岩国・大島(周防地域:山口県)の方がよかった。(未実施)
- (11) 石見・温泉津(石見地域:島根県)の方がよかった。(未実施)
- (12) 向日・洛西・宇治(山城地域:京都府)の方がよかった。(未実施)



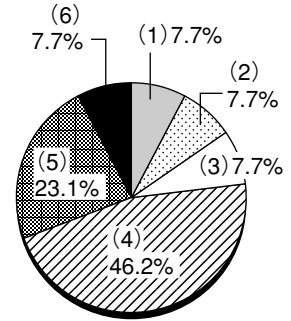
[今後の場所について]

今後の研修場所(2泊3日の日程)	1位	2位	3位	合計人数	合計得点
(2) 善通寺・琴平・いの・高知(讃岐・土佐地域:香川・高知県)	1(0)	1(0)	0(0)	2(0)	5
(3) 草津・大津・信楽(近江地域:滋賀県)	0(0)	6(3)	1(0)	7(3)	13
(4) 吉野ヶ里・柳川・太宰府(筑紫地域:佐賀・福岡県)	0(0)	1(1)	1(1)	2(2)	3
(5) 吉備路・備前・牛窓(備中・備前地域:岡山県)	0(0)	1(1)	6(3)	7(4)	8
(6) 津和野・萩(石見・長門地域:島根・山口県)	1(0)	0(0)	0(0)	1(0)	3
(7) 大三島・松山(芸予地域:愛媛県)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0
(8) 横田町・出雲(奥出雲・出雲地域:島根県)	1(1)	1(0)	2(1)	4(2)	7
(9) 福山・倉敷(備後・備中地域:広島・岡山県)	1(0)	0(0)	1(0)	2(0)	4
(10) 岩国・大島(周防地域:山口県)(未実施)	0(0)	1(0)	0(0)	1(0)	2
(11) 石見・温泉津(石見地域:島根県)(未実施)	0(0)	1(0)	2(0)	3(0)	4
(12) 向日・洛西・宇治(山城地域:京都府)(未実施)	9(4)	1(0)	0(0)	10(4)	29

(注) ()内の数字は女子学生の数を, 合計得点は1位:3点, 2位:2点, 3位1点とした総得点を示す。

④〈場所(特別企画)〉

- (1) 奈良地区(斑鳩・飛鳥・奈良など)に限定して実施するのがよい。
- (2) 京都地区(京都市内及び周辺)に限定して実施するのがよい。
- (3) 奈良・京都地区に限定して実施するのがよい。
- (4) 奈良・京都地区以外でもいいが、日本の歴史・文学遺産(信州、鎌倉、日光など)に限定して実施するのがよい。
- (5) 日本の文化遺産(歴史や文学遺産)以外に自然遺産(屋久島、白上山地など)にまで範囲を広げて実施するのがよい。
- (6) 歴史的に日本文化と関わりが深い近隣諸国(韓国、台湾、中国など)にまで範囲を広げて実施するのがよい。
- (7) 特に有名地区を訪問する特別企画は必要なく、中国・四国地区(瀬戸内地域及びその近接地)及びその周辺の地域文化に限定して実施するのがよい。
- (8) 特に有名地区を訪問する特別企画は必要なく、中国・四国地区(瀬戸内地域及びその近接地)の地域文化に限定して実施するのがよい。

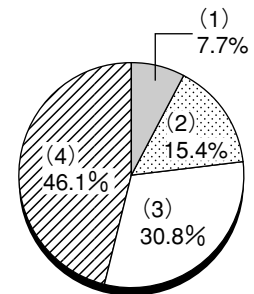


[研修合宿についての意見]

図-3

(V) 研修旅行と研修合宿について

- (1) 費用が安くすむところ(例:広島市内公共施設 1泊2日3,000円)で研修合宿を全員参加で行う。
- (2) 費用が比較的かからないところ(例:広島県内及び周辺 2泊3日2万円)で研修合宿を全員参加で行う。
- (3) 費用はかかる(例:京都2泊3日5万円/東京3泊4日7万円)が研修合宿(旅行)を全員参加で行う。
- (4) 全員参加の宿泊を伴う研修合宿(旅行)は特に必要ない。



(5) 結果の考察

① 研修に対する評価

〈参加学生の自己評価〉

まず、事前研修に対する自己評価について考察しておく。第1回～第5回の出席率の平均値は56.9%であった。年末・新年早々の忙しい時期ということもあり、授業科目『日本語文化研修』の受講者であった3年生(平均値73.3%)を除いては、総じてあまり高い数値とは言えないが、欠席者には資料等を読んでおくように指示した。事前研修で配布した研究参考資料(B4で合計24枚)の読破率は、5段階評価で全体で3.31で、‘半分程度読んだ’という参加学生が多かった。

次に、当日の研修に対する自己評価について考察しておく。〈総合的達成度〉の平均値が4.00となっているように、学生は総合的にそれなりに成果があったと考えている点をおさえておきたい。今回の研修のタイトルは‘祈りと保養：豊前・豊後の文化を訪ねる—中津・宇佐・由布院・国東の文化史—’であり、目的として、‘豊前(中津・宇佐)・豊後(由布院・国東)の古墳時代～現代にかけての日本語文化に関わる民俗資料及び文化資料を、実地踏査し、祈り・保養の面で相互に有機的に連携しながら発展してきた地域の文化を通して専門領域へのアプローチを行う’ことをあげている。実質的には、大分県の中津市、宇佐市、由布市、豊後高田市、国東市が研修地として設定された。

第Ⅲ期の筑紫地域、近江地域、讃岐・土佐地域、摂津・大和地域同様、今回も“「瀬戸内地域及び

その近接地」外で2泊3日”の研修を行った。日本の文化史の上で中心的位置にあり知名度も高い難波・桜井・吉野を研修地とした前回の摂津・大和地域と同じ評価の数値を得、また、前々回の讃岐・土佐地域に比べると評価が0.25高かった。これは、研修企画の形式そのものには大きな差はない点を考慮すると、地方とはいえ、福澤諭吉、宇佐神宮、由布院温泉など全国的にも知名度の高い“土地のたから”を研修の対象とできたことも一因していると考えられる。“日本とは何か”を考察する研修として、地域文化としての特殊性と共に、日本文化としての普遍性を有するヒト、モノ、コトを探り出し、研修の対象とすることはきわめて重要である。その点、今回の〈総合的達成度〉平均値4.00という数値は、地域の文化を直接体験することを通して普遍的な日本文化を探ることの可能性と有効性を示すものである。

結果的に18（前回の摂津・大和地域は20、前々回の讃岐・土佐地域は22、第8回の近江地域及び第6回の吉備地域では17）のイベントを実施したが、この数は過去の研修の中で3番目であり、多様なイベントを実施したことを示している。今回の18というイベントの数は、それほど遠隔地ではなかったことと研修地域や研修地が道路事情に恵まれていたことが第一の要因といえる。

一方、〈イベント以外の自由時間〉の平均値は4.15と過去の研修の中では、前回の摂津・大和地域の4.21に次いで2番目の順位であった。しまなみ海道を經由して松山まで行った第4回の芸予地域（1泊2日）の4.10が3番目であることを考えるとかなり高い数値である。これは移動中のバスや宿泊所で過す時間が充実していたことを示すものである。

従来に比してかなり高い数値になった要因を、まず、バスという移動手段及び生活空間の面からみておきたい。

移動経路のほとんどが、比較的眺望のよい高速道路もしくはのどかな自然の中を走る一般道路で、心配された濃霧や積雪による宇佐別府道路・大分自動車道の通行止めもなく、また、一部区間（帰路の徳山市内）を除いて交通渋滞もほとんどなかった。帰路には、移動手段として研修としてはじめてフェリー（竹田津港～徳山港）を利用した。長距離移動による疲労の軽減と旅の興趣の付加を意図したものである。季節風の影響もあり船はかなり揺れたが、豊前・豊後が国東半島を介して瀬戸内海という海の西端に位置付けられることを実感することができた。一方、今回の研修は、2日目午後及び3日目午前の一部が雨となったように、必ずしも天候には恵まれなかったが、研修全体としては温暖な日が続き、移動中の車窓から豊前・豊後の景観を堪能することができた。

次に、要因を宿泊所の面からみておきたい。

宿泊所は、宇佐市中心部のやや北に位置し、宇佐風土記の丘や駅館川に隣接しながら南東に宇佐神宮の神体山としての御許山を眺望できる公的な宿舎と由布院盆地北部の名所である金鱗湖や由布院のイメージをつくった有名旅館のある閑静な地区に位置し、北東に由布岳を眺望できる民営旅館であった。前者に関しては、日本有数の名刹を持つ広大な宇佐平野を見渡せる宿で、実際に宿舎入りは、1日目夕方の宇佐風土記の丘における自由研修を経て、建物を目印に直接徒歩で行うことができた。宿舎では、充実した温泉施設と豊前・豊後の山海の珍味を堪能することができた。また、後者は、建物の外観は白と黒を基調とした落ち着いた和風であるが、西欧の山荘風の館内には安全に配慮した完全バリアフリーを取り入れ、離れの貸切露天風呂とスパ風の内湯の併設に象徴されるように、日本の温泉文化と西欧の保養文化が融合したような宿泊所であった。安全で質の高い保養を、旅館のような落ち着いた雰囲気の中で可能な限り安価に体験してもらおうとする宿の意図が実感できた。特に、当宿のマネージャーは、かつて町の職員として由布院のまちづくりに関わった経験を持ち、自主トレーニングで当地を訪れる選手の世話役として広島カープとの関係も深く、研修の参加者は、そのことにまつわる夕食時の親近感と生活感の溢れるウエルカムスピーチをはじめとして、氏のさりげない言動を通して由布院ならではのホスピタリティを体験することができた。両宿の夕食は、それぞれ地元

素材を用いた和風懐石料理、足湯付きの地鶏のバーベキュー料理であり、土地の風土や宿泊所の特徴を生かしたものであった。結果として1日目和食と2日目洋食ともなり、バランスの良い食事を通して地元の食文化を体験できたことも高い評価につながったと考えられる。いずれも、豊前・豊後の自然や風土を直接体験するという意味では、宿泊所として貴重な空間と時間を提供してくれた。参加者は、宿泊所のヒト・モノ・コトとの交流を通して祈りと保養の国としての豊前・豊後を感じながらそれぞれ旅情を味わい親睦を深めたようである。今回の二つの宿泊所に共通する点は、その規模の大きさと館内施設の充実度にある。特に、両者共に露天風呂を含む本格的な温泉施設を持っていた。本研修では、安全性と経済性を重視する視点から、比較的規模の大きい公営宿舎を中心に宿泊所を選定している。今回は、適当な公営宿舎がなかったため、施設・食事の内容、価格、立地条件などを考慮して、結果として、宇佐では近年公営から民営へと移行した公的な宿泊所が、また、由布院では大学のゼミやクラブなどの合宿の実績を持つ民営の宿泊所が選定された。今回同様適切な公営宿舎がなかった前回の摂津・大和地域における研修では、結果としていずれも規模の小さいペンションと老舗旅館を宿泊所として利用した。施設は必ずしも充実していたとはいえないが、貸し切りによるそのアットホームな雰囲気は魅力的であった。今回は、“祈りと保養”を研修の共通テーマとしたこともあり、温泉を中心に充実した館内施設を持つ規模の大きい宿泊所で個別に自由にゆったりと時間を過ごした点は有意義であった。しかし、3年生を主体としたゼミ合宿的要素も持った研修では、可能ならば、ホームステイ的視点に立ち、地元の人々と密度の濃い人間的交流のできる可能性を持った比較的規模の小さい宿泊所を選定することも有効であろう。

18のイベントを比較してみると、それぞれ平均値4.62, 4.54とあるように、学生は、2日目午前の〈宇佐神宮現地説明〉と引き続き実施された〈宇佐神宮自由研修〉に特に成果を得たと感じている。

前者は、前夜にフリートークを行った地元講師によるもので、当地における直前学習によって宇佐の自然・風土や宇佐神宮の歴史について基本的な知識や地元の生の情報を得ていたこと、鬱蒼と繁るイチイガシに囲まれた上宮と下宮を中心に広大な神域を持つ宇佐神宮の圧倒的な存在感と歴史ロマン溢れる講師の語りに魅了されたことによるところが大きい。後者は、前夜のフリートークに次いで同じ地元講師から現地説明を受けたいうで改めて自分の興味関心に応じて研修を行えたこと、比較的コンパクトなエリアに多様な見どころを持つ宇佐神宮で時間的に余裕を持って神域の雰囲気を直接体験しながら研修できたことが要因といえる。

『日本語文化研修』では、到達目標の一つとして、“五感を通して把握したことを文章化し発信する”ことをあげている。また、第Ⅳ期の研修では、方法論として地元の文化にかかわるヒト・モノ・コトとの“交流”に重点を置いている。極めて高い評価を得たイベントがいずれも地元の文化と五感を通して直接的に交流するものであったことは、研修の趣旨に沿うものであり、今回の成果は今後の企画立案に生かせるものである。

2日目午後の〈由布院美術館展示説明〉〈由布院美術館講演〉、3日目午前の〈熊野磨崖仏現地説明〉〈真木大堂現地説明〉もそれぞれ平均値4.38, 4.31, 4.31, 4.31と高い。前二者は、広島熊野町出身の放浪の詩人画家佐藤溪との出会い、由布院のまちづくりとのかかわりの中での自然と風土を生かした私設の美術館の開館などについて、美術館の創始者である館長から直接話を聴講したうで、結果として生まれた美術館の独創的な建物群や施設、興味深い展示品を解説・紹介してもらったことによる。もっとも、今回の研修では、文学系の研修としては、かろうじて放浪の詩人画家佐藤溪が扱われただけである。異文化の創造的融合を共通テーマとして研修を企画していくと、いわゆる文学系の研修イベントが少なくなりがちである。もとより文学は文化史の重要部門の一つである。その点で文学系の研修イベントの再構築という新たな課題が見えてきた。また、後二者は、同じ気さくな人柄の地元文化財ガイドの方の案内で、自然石の急な乱積石段を登り、大日如来と不動明王の雄大な石仏を拝しながら

ら国東修験の峰入りの出発点としての行場を体験しえたり、六郷満山六十五ヶ寺の本山本寺として三十六坊の霊場を有したという馬城山伝乗寺のかつての隆盛あるいは幾多の難を逃れて現存する九体の仏像の物語る地元の人々の厚い信仰や守護に関する話を聴講しながら現地で仏像を見学し、製作者や往時の人々の魂に触れえたりしたことが評価された要因といえる。

今回の4つのいわゆる自由研修の平均値3.81は、過去全10回の中の第1番目の数値となった前回の摂津・大和における研修の平均値4.45や第2番目の数値となった第5回の大和地域を対象とした特別企画の平均値4.36と比較するとかなり低い数値である。十分な研修時間が確保できなかったこと、天候に恵まれなかったこと、重要かつ多様なテーマでの実地踏査が可能であるという条件を必ずしもすべての研修地が満たしてはいなかったことが大きな要因である。特に地方における自由研修の地に関しては、優れた研修地の選定は当然のこととして、知名度の低さを補うためにも、参加者の強い問題意識や企画者の創意工夫が求められることを改めて認識する結果となった。

今回講演及びフリートークは全部で7つで、福澤諭吉旧居・記念館で2つ、大分県立歴史博物館で2つ、宇佐の宿泊所で1つ、由布院美術館で2つ実施した。講演全体の平均値は4.00で高い評価であった。特に今回の宇佐の宿泊所で実施したフリートークの〈地元郷土史愛好家を囲む会〉は、研修参加者の69.2%にあたる9名の3年生が『日本語文化研修』の受講者として出席を義務付けられていたが、翌日の宇佐神宮での現地説明及び自由研修を想定した宇佐の自然と風土についての話は、淡々とした中にも郷土史愛好家としての郷土愛が自然と滲み出てくるよう語りであり、その秘められた熱意と素朴な親近感が4.11という高い数値につながったと考えられる。一方、〈大分県立歴史博物館講演〉では、「宇佐八幡宮と神仏習合」と題して、神仏習合、宇佐八幡神と神仏習合、神仏習合と神のすがた一神像の出現—について、切れ味鋭い解説が行われたが、学生の自己評価は3.31と必ずしも高くない。謙虚な評価といえそうであるが、やはり事前学習の不備が最大の要因であろう。もっとも、精神文化を中心とした異文化の創造的融合を共通テーマとして研修を企画していくと、内容的には抽象度が上がりレベルが高くなりがちであることは否定できない。特に、基調講演的な役割を持った講演では、その傾向が強くなる。精神文化を中心とした異文化の創造的融合という共通テーマに対応する事前学習のあり方が問われる結果となった。全体としては、今回の平均値4.00は、第1回～10回の研修における同種の講演の平均値と比べて、過去4番目の数値であり、高い評価となった。

以上を総括するならば、“宇佐神宮現地説明あるいは宇佐神宮での自由研修を中心に、講演・フリートークや現地説明など地元講師との交流を目指した研修を通して、豊前・豊後の文化・歴史・風土について学ぶと共に、改めて豊前・豊後地域には、九州北部の地域であると共に瀬戸内海の西端に位置付けられる地として大陸文化受容の先進地としての伝統があり、一部内容的に難しさを感じる面もあったが、特に“祈り”“保養”という視点から異文化が創造的に融合した文化があることを認識し、また、それに関する価値ある歴史的遺産や文化施設を直接体験して感銘を受けたし、天候にはあまり恵まれず帰路の船旅も揺れに苦労したが、バスによる移動は十分な休憩時間と高速道路や整備された道によって総じて快適であり、地元講師の人たちとの交流もできたし、研修エリアに近接したあるいは研修エリア内の歴史遺産や豊かな自然に恵まれたところにある宿舎で充実した温泉施設を利用しながら気の合う友人と共に有意義な時間も過ごせ、意欲を持って研修に参加できた”という参加学生の平均像を思い描くことができよう。

〈企画に対する評価〉

まず、事前研修に対する評価について考察しておく。第1回～第5回の学内事前研修形式及びその企画内容に対する評価の平均値は、それぞれ4.15, 4.00であった。また、第6回～11回のバス内事前研修形式及びその企画内容に対する評価の平均値は、それぞれ3.62, 3.77であった。学内事前研修の企画

内容に対する評価は、前回と同じ数値で比較的高かったが、それは、『日本語文化研修』の受講者の研修への参加率が高かった点が要因と考えられる。各回が上述のように有機的に連動しているため一度欠席すると流れがつかみにくくなる点は否めない。一般参加者に学内事前研修への出席を促す努力も必要である。

次に、研修のイベント企画に対する評価について考察しておく。研修旅行のイベント企画に関しては、18のイベント企画の平均値が4.14であるように、参加学生は比較的高い評価をしている。標準偏差の平均値も0.72と分散が比較的小さい。上述の〈総合的達成度〉の4.00と勘案すると、参加学生は、全体としては、企画そのものの充実度を認めた上で自らも意欲を持って行動し企画を消化しつつ成果を上げた結果となっている。企画に対する評価が自分自身に対する評価よりも高いものが多く、総じて企画そのものは評価されているといえよう。

② 研修に対する意見

ここでは、〈時期〉〈日程・費用〉〈場所〉に関する全体的な意見を確認しておく。今回の研修参加者は、〈時期〉〈日程・費用〉〈場所〉共に現況に対して肯定的である。特に〈日程・費用〉については、〈2泊3日（2万円程度）でよかった〉とするものが92.3%で、参加学生のほとんどが短期集中型の2泊3日の日程を支持していることがわかる。〈3泊4日（3万円程度）ぐらいがよかった〉とする参加学生もいたが、自己負担となる費用の抑制、集中力の持続の面で、2泊3日（2万円程度）は現実的である。

〈今後の場所（2泊3日の日程）〉については、選択肢の中では〈向日・洛西・宇治（山城地域：京都府）（未実施）〉が29点、〈草津・大津・信楽（近江地域：滋賀県）（3年前実施）〉が13点、〈吉備路・備前・牛窓（備中・備前地域：岡山県）（5年前実施）〉が8点と希望者が多かった。

特別企画の訪問場所については、様々な考え方に分かれたが、合計100%すなわち参加学生全員が、少なくとも中国・四国地区及びその周辺の地域文化を越えて研修地を設定することを支持していることがわかる。

2009年4月には、新カリキュラムに移行し、新1年生が入学してきた。日本語文化コースでは、かつての日本語文化専攻時代と同じように、日本文化の分野が日本文学・文化の分野として復活し、これまで企画立案における助言・指導を依頼してきた本学歴史系教員である民俗学及び考古学の専任スタッフもコースの一員に正式に加わった。『地域文化論』『地域の文化と歴史』などの新しい授業科目も設定され学ばれる中で、2011年度には新カリキュラムの中で『日本語文化研修』が実施されることになる。これを機に、同じ2011年度に開始される予定の第V期の研修のあり方を長期的展望に立って検討する必要がある。

今回運営の中心となったリーダー及びサブリーダーの3年生3名は、はじめて研修に参加した学生であった。ここ数回の研修同様、やはりかつての研修経験者のリーダーのように活躍するまでにはいたらなかった。一般的に、下位学年の時から経験を積んできた上位学年ほど研修の理解度や達成度は高い。したがって、まずは、下位学年からの継続的な参加を促すことが必要である。その上で、授業科目としての意味合いが強くなり、単位取得を大前提あるいはその取得を中心的な目的として参加する学生も今後増えることが予想され、研修のいわゆるリピーターが少なくなる中、授業科目であると共にイベントでもあるという意識を持ってこの研修に取り組める学生リーダーの育成は欠かせない。リーダーに関しては、今回は希望者を募ると共に筆者のゼミ学生を当てて時間をかけて育てることも検討している。また、参加者一人一人が、イベントを実行するメンバーであるという意識を持って行動することも重要である。今回は、明確に役割分担を決めた結果、参加者の間に研修グループとしての一体感が醸成され、役割の実行を通して相互交流も活発になった。この成果は、今後を生かせるも

のである。

以上の考察を通して明らかになった今後の新たな課題は、‘精神文化を中心とした異文化の創造的融合という共通テーマに対応しうる事前学習’‘文学系の研修イベントの再構築’‘移動手段としてのフェリーの利用の是非及び効果的な活用’ということになる。今後の研修の企画・運営・実施に生かしていきたい。

③ 研修合宿についての意見

今回のような自由参加形式で移動を伴う旅行を中心とした研修に参加した学生が、全員参加形式の研修合宿についてどのように考えているかを調査する目的でアンケートを行った。ここでは、〈研修旅行と研修合宿〉の関わりについての全体的な意見を確認しておきたい。

“全員参加の宿泊をとまなう研修合宿”を行うことに対しては、46.1%の学生が“特に必要ない”としている。一方で、今回の研修に参加した学生の53.9%は、“全員参加形式の研修合宿あるいは研修旅行”に対して肯定的である。しかし、全員参加形式の研修合宿を単独で行うことは、現時点ではやはり難しい。まずは、選択科目としての『日本語文化研修』という授業科目を充実させることを第一義に考えるべきであろう。

終わりに

継続課題として残っていた‘通常研修企画と特別研修企画のバランスとサイクル’については、前回の第10回研修において5年ぶりに新たに摂津も加えて大和地域において研修を実施したうえで、今回豊前・豊後地域を訪問したことによって、日本という国のまほろばとも言われる大和地域あるいは古代日本の中心的文化圏を形成した畿内で、実際に少なくとも5年に1回のペースで特別研修を2度行い、今回その3順目を開始したという実績を残した。これは連続することも含めて、テーマに応じて従来にも増して柔軟に特別研修企画を実施すること、さらにいうならば、通常研修企画と特別研修企画とを従来のように明確には区別しないことを示している。今回は、この方針にしたがって、地域としてははじめてではあるが、前回と同じ畿内に属する山城地域において研修を実施する。

また、現在は、交通手段としてのバスを利用及び2泊3日という日程上の条件の中で、大和あるいは大和以外の畿内での研修を特別研修企画としているが、訪問地域については交通手段や日程に応じてその範囲を拡大してもよいと考えている。

‘バス内事前研修における視聴覚機器の有効かつ円滑な利用’についても、事前研修用視聴覚資料としてのVTRやDVDを、内容や機能別に、文化史の教科書的なもの、文化の部門別のもの、旅行記的なもの、トピック的なもの、ドラマの中で当該地域が舞台となっているもの、娯楽的なものなどに分類したうえで、日程及び参加者の疲労度を勘案しながらバランス良く配置し、ある程度の時間的余裕を持たせて利用したことで解決できた。例えば、旅行記的なものとして『豊後・日田街道（新シリーズ 街道をゆく9）』（制作：NHK）を、トピック的なものとして『プロジェクトX 湯布院癒しの里の百年戦争』（制作：NHK）を、連続して30分を超えない範囲でそれぞれ何回かに分けて視聴した。

前回課題として生じた‘宿泊先におけるフリートーク企画の交流的視点に立った運用’については、今回の宇佐における1日目夜のフリートークでは、適度な広さの落ち着いた和室の会場で、2日目午前に宇佐神宮の現地説明をする同じ講師とそのオブザーバー的な人物によるものにし、互いにフリートークの動機付けを明確にしたり、三者間の関係の中で実施することで解決できた。具体的には、団長用の二間続きの適度な広さの床の間付きの和室を会場に、地元講師とその紹介者の観光協会事務局長の参加のもと、従来にも増してアットホームな雰囲気の中で会が進み、活発に質疑応答が行われた。

過去の研修では、第6回の牛窓、第8回の信楽でのフリートークがこのようなパターンであったが、自由参加形式のうえに2日目の夜ということで疲れがたまっていたり仲間との最後の夜の交流に忙しかったりと、いずれも参加者は限られていた。つまり、フリートークは、『日本語文化研修』の受講者は必修とし、可能ならば1日目の夜に2日目午前のイベントと同一の地元講師によって実施することで有意義なものになるといえる。

また、‘研修全体（事前・事中・事後）を通じた役割分担を中心とした参加者のさらなる組織化’についても、研修と生活の2面に分けたうえで、それぞれ参加学生の役割を明確化させることである程度めどが立ってきた。具体的には、研修、生活の両面で、学生リーダーを1名、サブリーダーを2名決め、点呼を中心に、参加学生の研修生活全般を統括するようにした。特に研修面では、テープ録音長とテープ録音係員、ビデオ撮影長とビデオ撮影係員、写真撮影長と写真撮影係員を決めた。生活面では、A～Cの3班分け、それぞれ班長を決め、班員の点呼、グループ員への連絡、入館券の配布などの役割を行うようにした。

しかし、前回生じた‘ホームステイ的視点に立った宿泊所の選定’‘精神文化としての宗教文化の直接体験の扱い’については、前者ではペンションや民宿などの利用、後者では宇佐神宮の祭礼の体験などを検討したが、諸般の事情で実現せず、解決にはいたらなかった。また、‘新カリキュラムの日本語文化コースにふさわしい研修内容の再考’についても、今後の検討課題として残った。また、‘教員と学生の協働による研修地選定システムの確立’‘団体割引を利用する場合の必修スポットを含む形式の自由必修研修の運営方法’‘伝統工芸の実技体験あるいは伝統芸能の観賞の扱い’‘研修における学生リーダーの育成’も継続検討課題のままである。さらに、今回の研修を通して‘精神文化を中心とした異文化の創造的融合という共通テーマに対応しうる事前学習’‘文学系の研修イベントの再構築’‘移動手段としてのフェリーの利用の是非及び効果的な活用’という新たな課題も見えてきた。また、第V期の企画も含めて長期的展望に立てば、今後、日本語表現関係教員と日本文学・文化関係教員との協働、教養科目の地域分野教員との連携なども視野に入れる必要がある。

本研修は、2009年度も「私立大学等経常費補助金特別補助（教育・学習方法等改善支援ニ：学生の実体験を重視した教育研究）」の企画として認められ、予算がつくことになった。第4期3年計画の2年目は、2泊3日の日程で、‘山城の歴史と文化’をテーマに、向日・洛西・宇治を訪問エリアとして設定し、内容の検討を始めている。日本語文化コース3期生（3年生）を対象とした『日本語文化研修』の受講者としての参加者も既に決定し、レポートの執筆をはじめ、事前学習を進めている。上述の残された問題点について引き続き検討しながら、今回の結果も踏まえて、新たな課題の克服につとめつつ、今後可能性を秘めた日本語文化研修の新たなあり方を考究していきたい。

[注]

- (1) 秋枝（青木）美保・戸田利彦『『異文化』の理解を目指した研修旅行（Ⅳ）—“瀬戸内（福山・倉敷）国際交流史”の実地研修—』、『比治山大学現代文化学部紀要』第6号，1999
 戸田利彦・秋枝（青木）美保『『異文化』の理解を目指した研修旅行（Ⅴ）—“島根（奥出雲・出雲）鉄の文化史”の実地研修—』、『比治山大学現代文化学部紀要』第7号，2000
 戸田利彦・秋枝（青木）美保『『異文化』の理解を目指した研修旅行（Ⅵ）—“瀬戸内海中部（芸予地域）の文化史”の実地研修—』、『比治山大学現代文化学部紀要』第8号，2001
 戸田利彦・秋枝（青木）美保『『異文化』の理解を目指した研修旅行（Ⅶ）—“西中国地方（津和野・萩）の文化史”の実地研修—』、『比治山大学現代文化学部紀要』第9号，2002
 戸田利彦・秋枝（青木）美保『『異文化』の理解を目指した研修旅行（Ⅷ）—“大和地域（斑鳩・

飛鳥・奈良)の文化史”の实地研修,『比治山大学現代文化学部紀要』第10号,2003

戸田利彦・秋枝(青木)美保「『異文化』の理解を目指した研修旅行(Ⅸ)―“吉備地域(吉備路・備前・牛窓)の文化史”の实地研修,『比治山大学現代文化学部紀要』第11号,2004

戸田利彦・秋枝(青木)美保「『異文化』の理解を目指した研修旅行(X)―“筑紫地域(吉野ヶ里・柳川・太宰府)の文化史”の实地研修,『比治山大学現代文化学部紀要』第12号,2005

戸田利彦・秋枝(青木)美保「『異文化』の理解を目指した研修旅行(XI)―“近江地域(草津・大津・信楽)の文化史”の实地研修,『比治山大学現代文化学部紀要』第13号,2006

戸田利彦・秋枝(青木)美保「『異文化』の理解を目指した研修旅行(XII)―“讃岐・土佐地域(善通寺・琴平・いの・高知)の文化史”の实地研修,『比治山大学現代文化学部紀要』第14号,2007

戸田利彦「『異文化』の創造的融合の理解と交流を目指した日本語文化研修(I)―“摂津・大和地域(難波・桜井・吉野)の文化史”の实地研修,『比治山大学現代文化学部紀要』第15号,2008

- (2) B5(表のみ)1枚からなる自由研修計画書を①～③の3枚使用。[注](1)の文献の[資料2]に同形式のもの掲載。
- (3) 本稿の執筆者である戸田も、この研修記録報告書に、「『気』の文化の継承過程に関する研究(VI)―八幡信仰の成立事情を中心に―(P.25～42)という小稿を執筆し掲載した。
- (4) 各イベント企画のねらいは以下の通りである。

福澤諭吉旧居・記念館講演(テーマ:福澤諭吉の幼少年時代と中津)(福澤諭吉の思想と西洋文明の受容の理解)／福澤諭吉旧居・記念館展示説明(展示や旧居を通じた福澤諭吉の思想形成と人脈の理解)／福澤諭吉旧居・記念館周辺自由研修(自分の足で史跡や文化施設を踏査することによる中津の文化の理解)／大分県立歴史博物館講演(テーマ:宇佐八幡宮と神仏習合)(宇佐八幡宮の成立事情と神仏習合の理解)／大分県立歴史博物館展示説明(国東半島の風土と六郷満山文化の理解)／大分県立歴史博物館内及び宇佐風土記の丘周辺自由研修(自分の足で文化施設や史跡を踏査することによる宇佐の文化の理解)／地元郷土史愛好家を囲む会(フリートーク:宇佐の原点と魅力について)(地元生活者・郷土史愛好家の目を通して見た宇佐の歴史や実情・生情報を聞くことによる宇佐の自然と風土の理解)／宇佐神宮現地説明(本殿[国宝]を中心とした宇佐神宮の歴史と文化の理解)／宇佐神宮自由研修(自分の足で史跡や文化施設を踏査することによる宇佐神宮及び宇佐の文化の理解)／由布院美術館講演(テーマ:由布院のまちづくりと詩人画家佐藤溪)(由布院の風土とまちづくりにおける美術館の位置付けの理解)／由布院美術館展示説明(展示芸術作品を通じた由布院の自然と風土の理解)／由布院自由研修(自分の足で史跡や文化施設を踏査することによる由布院の文化の理解)／宇奈岐日女神社(自由必修研修)(古代神奈備信仰と由布院の自然と風土の理解)／熊野磨崖仏現地説明(磨崖仏としての大日如来像・不動明王像を中心とした国東の石の文化及び熊野信仰の歴史の理解)／真木大堂現地説明(仏像を中心とした地元民の信仰心と六郷満山文化の理解)／田染荘小崎地区:田園空間博物館現地説明(中世の宇佐神宮領荘園と日本的景観の理解)／富貴寺現地説明(大堂[国宝]を中心とした浄土思想・阿弥陀信仰の理解)／両子寺自由見学(国東の風土と六郷満山文化の理解)

- (5) A3(表裏)2枚(Na1～Na4)からなる調査紙を使用。[注](1)の文献の[資料3]に同形式のもの掲載。

参考文献

- 上垣外憲一 (2000) 『日本文化交流小史—東アジア伝統文化のなかで—』 中央公論新社
- 大隈和雄 (2003) 『文化史の構想』 吉川弘文館
- J. V. ネウストプニー (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- 「21世紀の『日本事情』」編集委員会 (1999) 『21世紀の『日本事情』—日本語教育から文化リテラシーへ—』 『日本事情』研究会
- 細川英雄 (1994) 『実践『日本事情』入門』 大修館書店
- 細川英雄 (1999) 『日本語教育と日本事情—異文化を越える—』 明石書店
- 細川英雄 (2002) 『ことばと文化を結ぶ日本語教育』 凡人社
- 牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学』 アルク

戸田 利彦 (比治山大学現代文化学部言語文化学科日本語文化コース)
(2009. 10. 31 受理)